

## 有事の海

宇田 道隆

（東京水産大学名誉教授）

このごろ有事立法ということが話題になり、万々の奇襲に備えてという首相の議会問答もある。

「静中動有り」で、人間の活社会に「永遠の平和」は容易に望み難い。カントの哲学や神や仏の理想の世界にはそれが示されていて、現世では領土欲や権力闘争や「喰うか喰われるか」の闘争の凄じい世界の現実の姿は、第三次世界大戦の前夜祭のような火の手の煙りがアフリカに、中近東に、東南アジアに、あるいはもっと身近にいつ火を噴きかねない。日本人

達も国のためと信じて柳条溝、盧溝橋、真珠湾の事が起こされたこと、またソ連が終戦直前に満州、千島、樺太でしたことを忘れてはいない。

無事太平の海でも大ジケもあれば、地震津波も起こる。一旦緩急あるも、最早「義勇公に奉ずる」はよそ事で、自分の生活、家族の食料だけを確保しようという日本人が多いのだろうか？「二百海里時代」にはいつて海のタン白食糧資源や鉱物資源（石油やマンガン団塊—銅、アルミ、コバルトなどを含む）の獲得に熾烈な戦いが「吾等をめぐる海」にも既に始まっている。ミサイルを搭載した米・ソの潜水艦は日夜眼前に出没している。半島には、北朝鮮と韓国四百万もの精強な陸兵が屯ろしている。東西、南方の戦いが大きく燃え上れば、たちまちにして日本へ

の物資の輸送路は脅やかされ、断絶のおそれもある。食糧自給のできてない日本は終戦前後の苦悩をたちまち再現するだろう。戦後生れのガマンを知らない人々はすぐ革命騒ぎに乗るかも知れない。中にはチェコのようにソ連占領を迎えようとする人間もいるだろう。

有事の海の記憶は私たちにはまだ生々しいものがある。日露戦後に生れた筆者は、第一次大戦当時は小、中学生で、日本に船成金もでき、神戸海洋気象台も大正九年に船会社の寄付金でできた。甲種合格で砲兵少尉になった筆者は、太平洋戦争の前から終戦まで二回も応召し、大陸に南方に輸送船で狩り出されていたが、終戦の頃は船舶部隊、「有事の海」はその前、中日戦争当時から水産技師兼海軍水路部嘱託として流水の海に、南支の海にかけ廻っていた。日本の海

洋学者たちもそれぞれの職場にありながら、大陸から大豆、南方か

者に対する扱い、態度が全く異なり、軍の科学に対する認識の点で

兵科の少、中尉としてそのあと専門に近い方に廻された。要するに

南アジアに、あるいはもっと身近にいつ火を噴きかねない。日本人

洋学者たちもそれぞれの職場にありながら、大陸から大豆、南方から石油の缶をのせた海流イカダによる輸送や、対潜海中音響問題、終戦一年ぐらい前から急に本土決戦のアメリカ上陸作戦に備えての沿岸波浪観測予報の仕事に協力していた。筆者も南方から呼び戻されて字品の船舶司令部関係の船舶練習研究部や気象教育隊で関係の業務を終戦までやっていた。

だが戦後蓋を開けてみて、英米側の戦事研究と対比して余りにもその差が大きかった。第一に科学



者に対する扱い、態度が全く異なり、軍の科学に対する認識の点で日本は明らかに負けていた。これは何も海洋や気象に限らず全般的な問題でもあった。軍人が威張って政治や軍需産業などに力を入れ、科学に理解が不足して、科学者を活用できなかった。戦後の日本再建にも鬪志と孫呉の兵法、勤勉努力でGNPで世界を驚かす経済発展ぶりの反面、いろいろマイナス面を露呈したのもこれと裏腹の成り行きであろう。日本では軍部内でも陸海軍がシッカリ行っていなかったもので、特に海洋の方では協力が欠けるものが見受けられた。長年海洋学者でやって来た筆者が応召で砲兵隊で一年半いて、理博なら経理ができるだろうと銀行員の応召将校がいるのに金庫の鍵をおしつけられたりした。勅任官の海洋気象台長だった筆者は、

兵科の少、中尉としてそのあと専門に近い方に廻された。要するに科学者を軍人の上層部が余り信用していなかったのだから？中央気象台長に対する陸軍航空少佐の「非国民？」などどの口の利き方を見てもわかった。

路部囑託として流水の海に、南支の海にかけ廻っていた。日本の海

それに対して英米の対応はまことに見事であった。ウヅホール海洋研究所、スクリップス海洋研究所や英国の海洋研は全面的に軍に協力して大拡張（人員、予算、設備）し、所長は中将待遇、幹部は佐官待遇だった。若いレベルは海軍船舶局の局長になった。M・ユース・スピン・ハウスなどバチサーモグラフィの発明と海中音響伝播に大貢献し、スヴェルドラップ・ムンクは上陸作戦海岸波浪予報方式を確立、ロスビーは軍用気象で画期的な貢献とともに多数の人材を育成した。暗号がすっか



り解説されていたり、夜襲が赤外線ノット・ツインの夜間眺視ツインで丸見えでは勝ち目はなかった。日本もよく精神力で頑張ったが根本に問題があった。

さて、過去の体験による戦訓から西暦二千年をひかえて、国を守り、身を護るため、「有事の海」を頭に入れて、吾らは何をなすべきかである。日本人は長期計画が得意でない。一気呵成にオリンピック工事を手抜きであってもやるのは得意だ。基礎を堅めてじりじり気永にやろうとしない、短期決戦型が主流をなしてきた。だがこ

オッチ内閣のバンドルファイ蔵相が、九月一日に発表したイタリヤ経済に関する報告書のなかで、イ

れからはそれではいけない。子々孫々を思い、「鳴くまで待とう」家康型で、科学的に根本から長続きする方式でいくべきだろう。

## 日本とイタリヤの デノミ発言

むらたためごろう  
村田為五郎

(NHK解説委員)

ことしの日本経済は、一月四日に福田首相が伊勢参宮の記者会見で触れたデノミ発言から始まったような感があった。

もちろん、そのときも福田首相はデノミを近く実行するといったわけではない。もともと自分はデノミを時期がきたら実行したいと考えているけれども、それには条件がある。その条件というのは、

が、実体はIMF(国際通貨基金)やEC(ヨーロッパ共同体)からの借款に大きく頼っているし、こ

不況からの脱出と物価の安定と国際收支の均衡とにメドがついた時期ということであった。

福田発言はデノミ論者として機会があれば国民にPRしておきたい気持ちもあったのであるが、例によって株式市場ではこれを材料として、印刷株、製紙株などのデノミ関連株が値上がりした。また土地などの含み資産にも評価替えへの期待がもたれた。

しかし、国会ではこのような不況下でデノミ問題などにわき見しているときではあるまいと迫られて、政府もいまはデノミ実行の時にはないし、ことしじゅうにデノミの宣言をすることもないと、統一見解を発表した。

十月の臨時国会でも質問があつて、どの閣僚もいまはその時期ではないと否定している。

ところが、イタリヤのアンドレ

日本でもデノミ論者がデノミのメリットとして挙げる理由の一つとして、デノミで通貨の単立が低